

1 反出生主義における三つの実践的不可能性と「無限責任」の問題
2 ー心情から読み解く〈信頼〉の不在とその行方ー
3 Three Practical Impossibilities in Anti-natalism and the Problem of "Unlimited
4 Responsibility"
5 -The Absence of <Trust> and its Future as Deciphered from Anti-natalist
6 Sentiments-

7
8 **キーワード：反出生主義，反生殖主義，誕生否定，無限責任，〈信頼〉**

9
10 1. はじめに

11 この10年、にわかに注目を浴びている思想がある。それは「この世に出現す
12 るいかなる生も害悪であり、したがってわれわれは新たな生をこの世に生みだ
13 すべきではないし、人類など早々に絶滅した方が良い」と考える、反出生主義
14 (anti-natalism) と呼ばれる思想である。もちろん世界を憎んだり、自らの生誕
15 を呪ったり、生まれ来る人々を憐れんだりすることだけなら太古の時代からあ
16 っただろう。しかしこの思想が新しかったのは、それを単なる個人的な主張の
17 次元に留めておくのではなく、普遍的な道德原理として再構成したところにあ
18 る。つまり理性を正しく行使すれば誰もが必ず同じ結論に到達するはずで、そ
19 うならないのはその人自身に問題がある、と主張しているのである。

20 この反出生主義は、学術的にはD・ベネター (D. Benatar) の *Better Never to*
21 *Have Been : The Harm of Coming into Existence* (2006) を契機として広がってい
22 った⁽¹⁾。しかし本論が注目したいのは、それが学术界を超えて少なくない人々
23 の共感を密かに呼んでいることである。それはなぜなのだろうか。その背景に
24 あるものとは何なのだろうか。このことを考察するのが本論の目的である。

25 本論では、まずベネターが提示した反出生主義の基本的な枠組みについて確
26 認し、その問題点について考える。その際特に着目したいのは、この思想を現
27 実に落とし込むことによって生じる不可能性の数々である。反出生主義の枠組
28 みは、思考実験としては成功しているものの、それは純粹に理念の世界の産物

1 ではない。本論では、このことを「苦痛除去の不可能性」、「選択の不可能性」、
2 「自立の不可能性」という三つの実践的不可能性の観点から独自に分析し、こ
3 の思想がいかに人間的現実と乖離した前提から構築されているのかということ
4 について見ていこう。

5 だが本論にとって重要なことは、それでも少なくない人々がこの思想に惹か
6 れてしまう根源的な理由である。本論では、反出生主義に共鳴する人々の心情
7 に着目することによって、その背景に、自身のあらゆる行動の全責任を無制限
8 に負うべきだとする「無限責任」の思考が潜んでいることを指摘したい。反出
9 生主義者は自身が意図せずして誰かを不幸にしてしまうことを恐れているので
10 あり、自身の身勝手な理由から、将来不幸になるかもしれない何ものかを生み
11 だすことが許されるのかと苦しんでいる。だが、考えてもみてほしい。そのよ
12 うな責任など、そもそも一人の人間が背負えるようなものだったのだろうか。
13 問うべきことは、そもそも現実的には想定しがたいはずの責任を、それでも負
14 うべきだと感じてしまう、われわれの歪んだ「世界観＝人間観」なのである。

15 本論では、こうした「無限責任」という名の幻想が、歴史的にはつい最近に
16 なって現れたものに過ぎないことについて確認する。そしてわれわれの社会に
17 おいては、実際に互いの生の責任を分け合うための〈信頼〉が欠落しているこ
18 とに目を向けたい。もしもわれわれが、これからも社会全体として〈信頼〉を
19 育むことができず、ありもしない自立の幻想に浸り続けるのだとしたら、人々
20 は「救い」を求めて、ますます反出生主義に傾倒せざるをえないだろう。

21

22 1. 反出生主義とは何か

23 1) 反出生主義の定義について

24 本論では先に、反出生主義を「この世に出現するいかなる生も害悪であり、
25 したがってわれわれは新たな生をこの世に生みだすべきではないし、人類など
26 早々に絶滅した方が良い」と主張する思想であると定義した。しかしこの定義
27 は、実はベネターを強く意識したものであり、必ずしも標準的なものではない。

28 例えば森岡正博（2020）は、反出生主義を「生まれてこない方が良い」思想

1 という形で広く捉え、ベネターの主張が、古代から続く「誕生否定」の思想的
2 系譜に位置づくものだとしている。その理解に立てば、今日の反出生主義は、
3 古代ギリシャや古代インドから西洋近代のA・ショーペンハウアー（A.
4 Schopenhauer）、E・M・シオラン（E. M. Cioran）らを経て継承されてきた、「誕
5 生否定」をめぐる新しい思想形態である、ということになるのである。

6 とはいえK・シングルトン（K. Singleton）が述べるように、原語である‘anti-
7 natalism’に着目すれば、反出生主義は生殖を推奨する‘natalism’の対抗思想と
8 しても位置づけられ、その思想的核心は、「（私が）生まれてこなければ良かつ
9 た」というよりも、あくまで「（新たな存在は）生まれてくるべきではない」と
10 主張する点にあると言うこともできる（Singleton 2020, 2021）。加えてその主張
11 の特徴が、道徳原理の表明である点からすれば、やはりそれはこれまでの一般
12 的な「誕生否定」の思想とは一線を画しているとも言えるだろう⁽²⁾。

13 以上のことを踏まえ、本論では以下のように整理しておきたい。まず、さま
14 ざまな経緯によって、人が「（私は）生まれてこなければ良かった」と考えるこ
15 とは、時代や文化を超えた人類全体の普遍的な体験だと言える。森岡が「誕生
16 否定」の思想と呼んでいるのは、こうした「ペシミズム的体験」を基盤に、そ
17 れを思想という形にまで高めたものだろう。「ペシミズム的体験」は、しばしば
18 「このような苦しみに満ちた生が待っているのなら、生まれくる子どもたちは
19 可哀想だ」、「このような苦しみに溢れた世界など、滅んでしまった方が良い」
20 といった言明となって噴出する。そして今日の反出生主義が、こうした次元に
21 とどまるものなら、実は話は早いのである。というのも誰かがそうした「ペシ
22 ミズム的言明」をしたところで、何ものかの生きる価値、存在する価値につい
23 て、他人がとやかく決めつける権利などどこにもない、と多くの人々は考えて
24 いるからである。しかし繰り返すように、反出生主義はそうした主張の仕方を
25 しているわけではない。そうではなく、理性を正しく行使するなら誰もが同じ
26 結論に達するはずで、そうならないのは、その人が感情的であったり、思考の
27 仕方を間違えていたりするからだと主張しているのである。反出生主義の背景
28 には、間違いなく「ペシミズム的体験」が存在するものの、われわれはいった

1 ん、それを単なる「ペシミズム的言明」とは区別しておく必要があるのである
2 (3)。

3

4 2) ベネターの反出生主義と非対称性の問題

5 それでは反出生主義の主張が、実際にどのような形でなされているのかにつ
6 いて見ていきたい。ここで重要になるのは、ベネターが前掲書で言及した、快
7 楽 (pleasure) と苦痛 (pain) の非対称性をめぐる分析である(4)。

8 ベネターはまず、以下の命題を一般的に妥当するものとして取りあげる。

9 (1) 苦痛が存在しているのは悪い (【命題①】とする)

10 (2) 快楽が存在しているのは良い (【命題②】とする)

11 ここまでは容易に同意できるだろう。これらは人間的生において、苦痛の総
12 量を最小にし、快楽の総量を最大にすることが正しいとする、功利主義の基本
13 的な前提でもある。そしてここには、明確な対称性があるのである。

14 ところがこれらを否定型にすると、その対称性は崩れてしまう。つまり単純
15 に、「苦痛が存在しないのは良い」、「快楽が存在しないのは悪い」とはならない
16 のである。まず前者で言えば、例えばわれわれが歯医者に行くのは、歯痛を取
17 り除くことが良いことだからである。そしてこのことは、特定の苦痛を現に感
18 じている主体がいなくとも妥当する。例えば現実に飢えた人々がいなかったと
19 しても、飢餓自体が存在しないことは良いことだからである。ところが、特定
20 の快楽が存在しないことは、必ずしも悪いとは言えない。例えばわれわれは、
21 飢餓に苦しむ人を見て彼らの苦痛を取り除く義務を感じるが、退屈だと落ち込
22 んでいる人を見てわざわざその人を楽しませる義務があるとまでは感じない。
23 このことをベネターは、快楽があることは良いことではあるが、快楽がないこ
24 とは必ずしも「悪くない (not bad)」と表現する (Benatar 2008: 41-42=2017:
25 51)。もっともそこには例外があるだろう。それは、すでに特定の快楽を享受し
26 ていた人から、それを取りあげる場合である。例えば趣味のジョギングができ
27 なくなることは新たな苦痛をもたらす、悪いことだと言えるからである。した
28 がってここからは、以下の命題が導かれることになる。

1 (3) 苦痛が存在していないことは良い——たとえその良さを享受している人
2 がいなくとも良い。(【命題③】とする)

3 (4) 快樂が存在していないことは、悪くない——そうした不在がその人にと
4 って剥奪を意味する人がいない限りにおいて。(【命題④】とする)

5 そしてベネターはこの論理を用いて、新たな存在の出生を問題にしていく。
6 まず、存在者 X が存在する世界 (シナリオ A) と、存在者 X が存在していない
7 世界 (シナリオ B) があるとする。このとき「シナリオ A」では、程度の差は
8 あれ苦痛も快樂も存在するだろう。しかし「シナリオ B」では、そもそも X は
9 存在していないので、苦痛もなければ快樂もない。これまでの【命題】に従う
10 のであれば、「シナリオ A」は良くも悪くもあるが、「シナリオ B」は苦痛が存
11 在しない良い面だけがあり、悪い面はないということになる。したがって、総
12 合的に考えれば、「シナリオ A」よりも「シナリオ B」の方が優れているという
13 ことになり、われわれは「シナリオ B」を選択すべきだということになるので
14 ある。つまり“非存在”は例外なく“存在”に勝るのであって、いかなる理由
15 があっても、新たな命を産みだすことは極力避けるべきだということになる。
16 なぜなら生まれなければ悪い面は皆無であるが、生まれてしまうと、何らかの
17 形で必ず悪い面が生じてしまうからである。こうして生殖を禁止し、人類がゆ
18 るやかな絶滅に向かっていくこと、それこそが理性の行使によって導かれる道
19 徳的に正しい結論だ、ということになるのである。

20 なお注意を要するのは、この結論が、存在者 X が実際に感じている苦痛や快
21 樂の総量とは無関係に導かれるという点である。われわれはしばしば、快樂の
22 総量が苦痛の総量を上回るのであれば、存在者 X の生は良いものだと考えてし
23 まう。しかし繰り返すように、快樂が存在しないことは悪くない。そして存在
24 者 X が生まれてこなければ、苦痛自体が存在しないため、それ以上に勝る事態
25 はないのである。またベネターはここで、すでに生まれてしまったものが非存
26 在になること (自殺) を推奨しているわけでは決してない (Benatar 2008:
27 212=2017: 220)。それは【命題】(4) の「剥奪」に抵触するおそれがあるから
28 である。問題になっているのは、あくまで生殖の是非についてなのである。

1

2 3) 反出生主義への反論や誤解

3 さて、以上の議論は納得できるものだろうか。ここでは前述した森岡による
4 反論を二点に絞って取りあげておこう⁽⁵⁾。

5 まず森岡は、ベネターが「存在／非存在」の比較と「生成／非生成」の比較
6 を十分に区別できていないとする。そしてベネターの枠組みが普遍的に妥当す
7 るなら「私が生まれてきたこと」と「私が生まれてこなかったこと」の比較に
8 おいても言えるはずだが、主体としてのこの私は「私が生まれてこなかった宇
9 宙」を想定してそれを価値づけることはできないので、両者はそもそも比較不
10 可能だとしている（森岡 2020: 282-289）。さらに別の論考では、先の【命題】

11 (4)「快樂が存在していないことは、悪くない」が、ベネター自身の直観に過
12 ぎず、その根拠が十分に示されていないと述べている（森岡 2021a: 5, 18）。

13 森岡の指摘は確かに一理あるだろう。だが、反出生主義者からは次のような
14 反論がありそうである。まず、森岡は「この私」をめぐる生成の問題について
15 論じているが、「この私」以外の存在者 X については、われわれは「X が生まれ
16 てこなかった宇宙」を十分想定することができる。このことが存在者 Y や存在
17 者 Z にも成り立つなら、「この私」にも成り立つと推論するにはそれなりの妥
18 当性があるだろう。また【命題】(4)については、もし快樂の不在が悪いと仮
19 定するなら、われわれには絶え間なく世界に快樂を生み出す義務があるという
20 ことになってしまう。しかしここでの「人々を幸せにする義務」は、常識的に
21 見て「人々を不幸にしない義務」ほどの拘束力を備えていない。その意味にお
22 いて、この直感には十分な妥当性があるといったようにである。

23 なお、前述したシングルトン（2021）は、反出生主義が混同されやすい立場
24 について複数挙げ、それぞれの違いを以下のように整理している。まず反出生
25 主義は、①善悪そのものが存在しないとする「道徳的ニヒリズム」ではない（む
26 しろ道徳的な善を突き詰めた結果として生殖を否定している）。また②能力の
27 高い人間、特定の属性を持つ人間ならば生まれてきて良いと考える「優生思想」
28 や「差別主義」でもない（能力や属性とは無関係にすべての人々の出生を否定

1 している)。さらに③子育て自体を忌避する「チャイルドフリー」でも（子育て
2 をする反出生主義者もありえる）、④理想的な人口管理下では生殖が許される
3 「新マルサス主義」でも（反出生主義は例外なく出生を否定する）、⑤性交や恋
4 愛や婚姻を否定する「反性交」、「反恋愛」、「反婚姻」でも（生殖をもたらさな
5 いのであれば、いずれも問題ない）、⑥人類のみの絶滅を想定する「反ホモサピ
6 エンス出生主義」でも（理論的には感覚を持つすべての存在の出生を否定して
7 いる）、⑦絶滅そのものを目的とする「絶滅第一主義」でもない（絶滅は生殖を
8 否定した結果に過ぎない）、といったようにである。

9

10 2. 反出生主義の実践的不可能性

11 1) 「苦痛除去の不可能性」という問題

12 とはいえ、本論は一連の議論にひとつも問題がないとは考えていない。とい
13 うのも、以上の議論は思考実験としては十分に成立しているものの⁽⁶⁾、それを
14 われわれの生の現実に落とし込もうとするやいなや、そこにはさまざまな矛盾
15 が引き起こされることになるからである。

16 最初に指摘したいのは、苦痛の除去をめぐる問題である。前述のように、ベ
17 ネターの議論において非存在の優越性を結論づけるためには、その大前提とし
18 て、【命題】(1)「苦痛が存在しているのは悪い」がなければならなかった。そ
19 して確かに、一見この命題は公理として同意できそうである。実際、苦痛に満
20 ちた拷問が地上から消滅することは多くの人々にとって望ましいことだろう。
21 しかし人間的な生の現実は、これほど簡単にはいかないのである。

22 最初に思考実験をしてみよう。ある世界 W では、高度に発達したメタバース
23 が生活の舞台となり、人々は脳以外の身体を捨てて、チューブと電極を通じて
24 直接情報機器に接続されているとする。また脳の生体管理は高性能のシステム
25 が完璧にこなしてくれるため、人々はそのことを忘れ、アバターとなって人生
26 の諸局面をメタバース内で完結できるとする。するとどうだろう。人々はチュ
27 ーブと電極を通じて、メタバースからあらゆる快適な刺激を味わうことができ
28 る。脳以外の身体を持たないために、臭い、汚い、きつい、痛い、醜いといっ

1 たあらゆる不快から恒久的に解放される。作り込まれたバーチャル人格が友人
2 でも恋人でも望み通りの関係性を演じてくれるので、対人関係においても不快
3 な思いを限りなく縮小させられるのである。問題は、もしも【命題】(1)が普
4 遍的に妥当するなら、ここでの「脳人間」世界は道徳的に望ましいと結論づけ
5 なければならないということである。しかし「脳人間」は、はたしてそのよう
6 な世界に生きる意味を見いだすことができるのだろうか⁽⁷⁾。「脳人間」たちは、
7 はじまりこそ目の前の「意のままになる世界」を貪り食うだろうが、いずれは
8 迫り来る虚無と退屈とに耐えられなくなり、ついには喜んで自ら生命維持装置
9 の電源を切るのではないだろうか――。

10 われわれが考えなければならないのは、こうした矛盾がなぜ生じるのかとい
11 うことである。手がかりとなるのは、そもそも人々が「苦痛を除去してほしい」
12 と主張するときの、「苦痛」とは何かということである。想像してみしてほしい。
13 登山の喜びは道中の疲労があるからこそ味わうことができる。勝利の充実感
14 仲間との不和や諍いを乗り越えて手にしたときほど深くなる。ところが時間
15 が経過していくと、喜びや充実感は薄らいでいき、かえってその記憶の存在が
16 新たな苦痛の種になることもあるのである。このことが示すのは、人間的な生
17 における「苦痛」のすべてが、歯痛や拷問のように単純明確なものではないと
18 いうこと、その大半は出来事として経験される全体のごく一側面であって、そ
19 の一部だけを特定して取り除くことはできないということである。実際われわ
20 れが「苦痛を除去してほしい」と主張するとき、本当に望んでいることは、し
21 ばしばまったく別のことであることがある。したがって「苦痛」が存在するこ
22 とを過度に一般化して「悪い」と断言することは、人間の現実に反している
23 と言える⁽⁸⁾。現実における「苦痛」とは、常に、誰にとっての「苦痛」なのか、ど
24 のような形で「苦痛」なのか、それがなぜ「苦痛」として感じられているのか
25 といった文脈に即して、個別的に論じなければならない問題なのである⁽⁹⁾。

26 興味深いことに、ベネターはこうした「苦痛除去の不可能性」について一面
27 では気がついている⁽¹⁰⁾。ところが彼は、「苦痛」を特定して取り除けないのであ
28 れば、やはり例外なく非存在は存在に勝る、そして「存在することは例外なく

1 悪い」という結論へと飛躍してしまう。しかし、われわれがここから学ぶべき
2 ことは別にある。それは【命題】(3)と(4)をめぐる非対称性以前の問題とし
3 て、人間的現実においては、その大前提であるはずの【命題】(1)がそもそも
4 成り立たないということなのである⁽¹¹⁾。

5

6 2)「選択の不可能性」という問題

7 次に指摘したいのは、選択をめぐる問題である。繰り返すように反出生主義
8 は、新たな命の出生を悪だと断じ、一切の生殖を否定する。しかしここには、
9 そもそもわれわれが人類(あるいは感覚を持つすべての存在)の出生をコント
10 ロールできるという隠れた前提がある。もちろんそれは、理念のうえでは可能
11 なのかもしれない。実際われわれはイヌやネコを病院で去勢できるし、そもそ
12 も異性と接触することを忌避していれば、子孫が生まれてくることなどありえ
13 ないはずだからである。だが人間的な生の現実には、やはりこれほど単純なもの
14 ではないのである。

15 実際、生の現実を目を向けてみれば、われわれの眼前に広がっているのは圧
16 倒的なまでの選択不可能性であることが分かる⁽¹²⁾。例えばわれわれは、明日誰
17 と出会い、誰と出会わずにすむかを自己決定することができるだろうか。1年
18 後に自身がどのような姿をしており、10年後に何をして生きているのかとい
19 ことを、意思の持ちようによって変えることができるだろうか。このことは当
20 然、生殖についてもあてはまる。一人で生きられない人間は、望まなくても誰
21 かと関わっていかねばならない。そしてさまざまな巡り合わせによって数
22 多の関係性に巻き込まれていき、たとえ自身で生殖を行わなくとも、さまざま
23 な理由や状況によって、誰かの生殖を助けてしまうこともあるだろう。われわ
24 れは忘れていたが、歴史的にはつい最近まで、人類は文字通り生殖をコントロ
25 ールすることなどできなかった。そうでなければ、口減らしのためだといって、
26 わざわざ生まれてきた我が子の首を絞める必要などなかったのである。

27 またベネターは、人類が絶滅に至るための方法についてあれこれ検討してい
28 るが、人類の絶滅など、なおさらコントロールできるような代物ではない。た

1 とえ地球が荒廃しようとも、文明が崩壊しようとも、人類はそう簡単には絶滅
2 しないからである。劣悪な環境のなかでも必ず生き残り、社会を再建しようと
3 する人間がでてきてしまうし、生まれてきてしまうだろう（そうした状況で再
4 興された社会が、現代の価値観からして生存したいと思えるものであるかどう
5 かはさだかではないが）。絶滅を真に成し遂げたいと思うのであれば、われわれ
6 はそうした人々を一人一人殺して回り、永遠とも思える徒労の果てに、ようや
7 く目的を完遂できるのである。

8 物事を理念の世界で完結できると信じている人々の奇妙さは、彼らがしばし
9 ば神のごとき万能感に基づいて世界を語ろうとする点にある⁽¹³⁾。彼らはどこか、
10 「あるべき何か」さえ確定できれば、あとは指をパチンと鳴らすだけで、そう
11 した世界を選択できると考えているかのようにさえ見える⁽¹⁴⁾。その奇妙さを喩
12 えるなら、明日のわが身さえ意のままにできない人間が、宇宙の存続さえ意の
13 ままにできる神の目線に立って、ウマやイルカに向かって、「真理に照らすとあ
14 なた方はいますぐ断種手術をすべきだ」と説教して回るがごときものである（ウ
15 マやイルカからすれば迷惑な話でしかなく、そのような「真理」につきあう義
16 理もないだろう）。ここでの問題は、選択可能な理念の世界の想像物を、選択不
17 可能性に満ちた現実そのまま持ち込もうとすることの安易さなのである⁽¹⁵⁾。

18 もっとも反出生主義者ならば、次のように反論するだろう。実現が困難であ
19 るということは、「真理」を否定する根拠にはならない。実際奴隷制が存在した
20 時代には、少なくない人々が奴隷制の廃止などありえなし、それを批判するこ
21 とには意味がないと考えていた、といったようにである。だがわれわれは「真
22 理」なるものに対して、とりわけそれを現実に持ち込む際においては、よくよ
23 く慎重になるべきではないだろうか。例えばもし、その「真理」が間違いだっ
24 たと判明したなら、彼らはどうするつもりだろうか。それが理念の世界であれ
25 ば、前言を撤回するだけで済む。しかし現実で起こしてしまったことは、決し
26 て訂正することなどできない。ここでわれわれが想起すべきなのは、歴史上で
27 「真理」とされたもののうち、後に間違いだったと見なされていないものの方
28 が少ないという事実である。例えば何万人もの死者を出したポルポトの改革は、

1 「真理」と見なした歴史法則を現実を持ち込んだ結果でもあったのである。

2

3 3. 反出生主義の背景にあるもの

4 1) 「反出生主義的心情」の所在

5 とはいえ本論の目的は、反出生主義を取りあげて、その粗探しをすることで
6 は決してなかった。本論においてより重要なことは、こうした反出生主義の主
7 張について、なぜ今日少なくない人々が共感を覚えているのかという問題であ
8 る。これまで見てきたように、確かに反出生主義の新しさは、古代から続く「ペ
9 シミズムの言明」を道徳的原理にまで高め、生殖を道徳的な悪だと断言した点
10 にあった。だが人々はその主張に魅力を感じているのは、はたしてそれが理屈
11 として成功して見えるというだけのことなのだろうか。本論が問いかけていたの
12 は、むしろその根底には「反出生主義的心情」とでも言うべきものがあるので
13 あって、その“心情”に寄り添い、それを正当化してくれるからこそ、人々は
14 反出生主義に惹かれてしまうのではないか、ということである。

15 ここで手がかりとなるのは、前述したシングルトンが挙げている、反出生主
16 義を支持する三つの理由である (Singleton 2021 : 5-8) ⁽¹⁶⁾。

17 (1) 生まれることで誰かに悪影響をもたらすから (【心情①】とする)

18 (2) 生まれることでたくさんの苦しみを経験するから (【心情②】とする)

19 (3) 子どもを作ることは自分勝手なことだから (【心情③】とする)

20 以上の指摘は、さまざまな点で示唆に富んでいると言える。まず【心情②】
21 からは、反出生主義の背景にはやはり「ペシミズムの体験」が深く結びついて
22 いるということが分かるだろう。反出生主義者の主張は、しばしば「ハエの入
23 ったスープ」や「一点の汚れもないキャンバス」によって喩えられる ⁽¹⁷⁾。つま
24 りどんなスープも一匹ハエが入っていれば台無しになる、純白なキャンバスも
25 一点の汚れがあれば台無しになるといった具合である。もちろんこうした比喩
26 からは、彼らがどこか過度な潔癖さを求めていることも示唆できる。だが重要
27 なことは、それ以上に彼らが、生を例外なく「ハエだらけのスープ」や「汚れ
28 に汚れたキャンバス」だと感じているということの方だろう。つまり彼らは、

1 そうしたスープを飲み続けることにも、キャンパスを正視し続けることにも耐
2 えられない、それならいっそのことスープもキャンパスも存在しない世界の方
3 が良いはずだ、と主張しているのである。

4 問題となるのは、【心情①】の扱いについてである。シングルトンはその「悪
5 影響」の例として、具体的には絶滅動物や人間同士の大規模な争いなどをあげ
6 ている。しかし人々が反出生主義に魅せられる契機となりうる「悪影響」には、
7 より身近な問題が含まれているのではないだろうか。例えば、人は生まれてし
8 まうことによって、誰かを傷つけてしまったり、誰かを不幸にしまったり
9 することもある。そしてそのことを悔いること自体は、確かに「ペシミズム的
10 体験」の範疇なのかもしれない。しかし現代社会においては、どこか他人に余
11 計な負担をかけ、不快な思いをさせることへの異様な怖れ、何かに躓いたり、
12 誤ったりすることによって他人から否定されることへの異様な不安で溢れかえ
13 っているようにも見える。つまり現代を生きる人々にとっての「ハエ」や「汚
14 れ」には、自身がもたらすかもしれない、あらゆる迷惑や、不快や、わざわい
15 などが含まれているのではないかということである。

16 次に【心情③】であるが、この問題は、しばしば「同意不在論」という形で
17 取りあげられてきた⁽¹⁸⁾。つまり、生まれてくる人間は決して同意して生まれて
18 きたわけではない。その意味において、生殖はある種の暴力、反道徳的な行為
19 なのではないかということである。しかしこの心情からうかがえるのは、それ
20 とは異なる別の論点である。手がかりとなるのは、むしろベネターも用いてい
21 る「ロシアンルーレット」の比喻だろう (Benatar 2008: 92=2017: 102)。例え
22 ばここに6発中、あたればとんでもない不幸に見舞われるとされる弾が入った
23 ロシアンルーレットがあるとす。このときあなたは、見知らぬ誰かの眉間に
24 向かって、それを撃ち込むことができるだろうか。何ものかを誕生させるとい
25 うことは、実はそれに等しい行為である。たとえあなたに子どもがほしい理由
26 があるからといって、それはあなたが行おうとしている行為に見合うほど正当
27 なものなのだろうか。それはあなたの単なるわがままや身勝手さではないのか。
28 彼らを感じているのは、おそらくこうしたことだからである。

1 人々が反出生主義に惹かれるのは、一連の理論が、人々の抱えるこうした心
2 情に寄り添い、それを正当化してくれるからであるように思える⁽¹⁹⁾。そしてそ
3 うだとすれば、枠組みや論理の正当性をめぐる論争をいくら繰り返したところ
4 で、それに惹かれる人々が救われることもないだろう。真の問題は、これらの
5 心情に込められている苦しみの意味、苦しみの理由にこそあるからである。

6

7 2)「無限責任」の牢獄と「自立の不可能性」という問題

8 ここで改めて考えてみたいのは、先に見た【心情①】と【心情③】が、歴史
9 的には最近になって現れてきたものではないかということである。例えば口減
10 らしが行われていた時代、はたして人々はそのような悩みに苦しんでいたのだ
11 ろうか。ただでさえ隣人と関わり、協力しなければ生きていけなかった時代、
12 良くも悪くも人が他者に影響を与えるということは、あまりに自明で問われる
13 ことさえなかっただろう。自身の不甲斐なさに「ペシミズム的体験」をするこ
14 とはあっても、それは誰もが経験しうる卑下や負い目の範疇であって、そこで
15 はお互い様だという基本認識が共有されていたからである。同様に子どもを産
16 むという行為は、そもそも個人的な問題であるとは見なされていなかった。そ
17 れはときに世間の目なざしやしがらみのためであり、現実問題としても、自分
18 以外のさまざまな人々のためであるとの共通認識があったからである。

19 したがってここで問うべきことは、いまを生きる人々が、なぜこれほどまで
20 に徹底して自らの生に対する責任を負わされているのか、いや、生に対する責
21 任を負わねばならないと感じているのかということである。誰とも関わりを持
22 たずに生きることなどわれわれにはできないし、ましてや関係性がもたらす影
23 響のあり方をコントロールすることなど不可能である。同じくわれわれは、い
24 まなお生殖を意のままにコントロールなどできていないし、生殖が純粹にその
25 人だけのためではないという事実も少しも変わっていない。それにもかかわら
26 ず、われわれは自らの行動が引き起こすあらゆる責任を、自分一人で負うべき
27 だと想像してしまう。生まれ来る誰かの人生の全責任を、この私こそが負うべ
28 きだと考えてしまう。だが、考えてもみてほしい。そのような「無限責任」な

1 ど、そもそも生身の人間が背負えるものなのだろうか、と。

2 こうしてわれわれは、一連の議論に隠されたもうひとつの前提に直面するこ
3 とになる。それは、自身の生を他者の生と切り分けて考えることが可能で、自
4 身のあらゆる行為の帰結を自らの責任とすることができるとする前提である。
5 そしてその前提は、これまで見てきた「苦痛除去の不可能性」や「選択の不可
6 能性」と同様に、ことごとく人間的現実を反したものである。

7 では、この「自立の不可能性」をめぐるわれわれの錯覚は、どこからもたら
8 されたものなのだろうか。前述のように、人々が「苦痛の除去は可能である」
9 と錯覚したのは、苦痛のなかに、歯痛や拷問など、実際に特定して取り除くこ
10 とが可能なのものが含まれていたからであり、それが理念の世界において、言っ
11 てみれば拡大解釈されてきたからであった。同様にして、現代のわれわれは、
12 高度な社会システムに依存することを通じて、自己決定がある程度保障された
13 環境を生活している。そのため誰とも直接関わらずに、一人一人があたかも「自
14 己完結」して生きられるような気がしてしまうのである⁽²⁰⁾。それぞれの生が自
15 立していると想像されるために、われわれは生の帰結の全責任を一人で負うべ
16 きだと想像してしまう。だがわれわれの眼前に広がっているのは、依然として
17 圧倒的なまでに自立不可能な数々の人間的な現実なのである。

18 したがって問題の根幹にあるのは、ひどく歪んだわれわれの「世界観＝人間
19 観」だと言うべきではないだろうか。いつの日からかわれわれは、現実にはあ
20 りえない「あるべき人間」、「あるべき社会」、「あるべき世界」を想像し、それ
21 を現実に強要するようになった⁽²¹⁾。そして生の現実においては、他者に影響を
22 与えずにすむことも、自身の生の全責任を背負うこともできやしないのに、誰
23 も苦しめず、誰も傷つけず、誰にも迷惑をかけまいとして、その理想と現実の
24 はてしない乖離さえも自己責任として背負おうとしている。だがどれだけ現実
25 を否定したところで、そのような「あるべき世界」が現実に訪れる日など来る
26 ことはない。人々が「真理」に即した存在であろうとしてもがけばもがくほど
27 に、人々はかえって現実に裏切られることになるのである。要するに、この恐
28 るべき現実否定の無間地獄こそ、「無限責任」という名の牢獄の背後にあるもの、

1 そしてあの心情に隠された苦しみの根源にあるものではないか、ということな
2 のである⁽²²⁾。

3

4 3) 〈信頼〉なき世界のゆくえ

5 それゆえここで気づかされるのは、そもそもわれわれは問いの立て方を間違
6 えてきたのではないかということである。例えば反出生主義者は、他者に悪影
7 響を及ぼし、新たな命を誕生させることに「正当な理由がない」と非難する。
8 しかしすべての行為に正当性を求めるのであれば、われわれは他の命を奪って
9 食べることに、病原菌を駆逐することに、そして空気を吸うことにさえも
10 正当な理由を示さなければならなくなる。また反出生主義者は、生殖を含め、
11 われわれが結局他者を手段として扱っていると非難する。しかしグローバル社
12 会に埋め込まれた 80 億もの人々のうち、生を実現する手段として他者の助け
13 を必要としていない人間など一人として存在しない。これらも結局、一連の議
14 論で何度となく見受けられてきた拡大解釈のひとつに過ぎないのである⁽²³⁾。

15 われわれが問わねばならなかったのは、むしろわれわれがどうしようもなく
16 他者に影響を与えてしまうという現実、どうしようもなく他者の助けを必要と
17 してしまうという現実を前に、いかにして人はより良く生きることが可能な
18 かということではなかつたらうか。そこにある負い目と残酷さとを否定する
19 ことなく、それでも前を向いて、一人一人がより良き生を引き受けていけるた
20 めの手がかりこそ、われわれが必要としているものではなかつたらうか。

21 思えば近代的な医療が普及する以前、人は怪我や病や栄養失調などによって
22 簡単に命を落とした。新たな命は、端的に言って、残された者たちが生きてい
23 くために必要としていたのである。しかし同時に、だからこそ人々はこの世界
24 に生まれてきてくれた新たな命に感謝し、生まれ来る人々が困らぬように手を
25 尽くすべきだとする倫理を構築してきた側面がある⁽²⁴⁾。人間は、その始まりか
26 ら集団的な生存の実現を目指して生きてきたのであって、互いの生が互いの生
27 存を支える契機になるということは、世代内においても、世代間においても、
28 人間存在が生きることそのものだったのである。

1 結局のところ、われわれが見失っているものとは、〈信頼〉なのではないだろ
2 うか⁽²⁵⁾。それは、より良く生きようとしてもなお意のままにならない現実を前
3 に、自身の苦しみは決して自身だけのものではないと思える〈信頼〉であり、
4 たとえ自身が不甲斐なくとも、そうした自身を受け入れ、居ても良いと言って
5 くれる場所があるはずだと思える〈信頼〉である。そして、たとえ目に見える
6 成果が得られなくとも、より良く生きようとした人々の痕跡には意味があると
7 思える〈信頼〉であり、来たるべき何ものかもまた、そうして去っていった人々
8 の生き方をいつかは祝福してくれるだろうと思える〈信頼〉である。

9 現代を生きるわれわれは、結局何ものをも〈信頼〉していないし、〈信頼〉す
10 ることができない。だからすべてを一人きりで背負おうとするしかないのであ
11 る。そもそも背負えるはずのないものを背負おうとして、結局は破綻してしま
12 うのである。多くの人々は誤解しているのではないだろうか。反出生主義者は、
13 決して無責任な人々なのではない。おそらく誰よりも責任を感じるからこそ、
14 そして真面目に生きようとするからこそ、人々はかえって反出生主義者になる。
15 世界や人間を心底憎んでいるから、人々は反出生主義者になるのではない。お
16 そらく誰よりも世界や人間を祝福したいと願い、その高すぎる理想に屈折した
17 からこそ、人々は反出生主義者になるのである。

18

19 4. おわりに

20 以上を通じて本論では、反出生主義に含まれる三つの実践的不可能性につい
21 て取りあげつつ、心情として、なぜ少なくない人々がその主張に惹かれてしま
22 うのかという問題について掘り下げてきた。

23 繰り返すように、反出生主義の論理は、結局のところ理念の世界においての
24 み輝くものであって、とても人間の現実に耐えうるものではなかった。われわ
25 れが何をどのように語ろうと、人類は続いていくし、絶滅することもないだろ
26 う。それはわれわれが、人生を、そして世界をどれほど憎んでいても、明日は
27 来てしまうし、世界はなくならないのと同じである。本論が主張したかったの
28 は、ならばその現実に一度は向き合い、寄り添ってみるべきではないかという

1 ことである。苦痛の除去も、完全な選択も、完全な自立もありえない生の不可
2 能性を前提として、それでもより良く生きるとは何かということこそ、真に問
3 われるべきことではないかということである。反出生主義者の苦しみは、「世界
4 観＝人間観」の歪みによって自ら生みだしてしまった恐るべきデーモン——そ
5 もそも背負えるはずのない「無限責任」という名の——がもたらした自縄自縛
6 の苦しみである。しかしその背景には、根源的な〈信頼〉の不在という、個人
7 の次元ではどうにもならない問題があった。したがってわれわれの社会が、こ
8 の先も互いの生の責任を分け合おうとすることなく、〈信頼〉を育くむことを怠
9 り、ありもしない自立の幻想に浸り続けるのだとしたら、人々はますます反出
10 生主義者に転向せざるをえないだろう。

11 ここでは最後に、本論において十分踏み込めなかった論点を二つだけ取りあ
12 げておきたい。ひとつ目は、こうした現実離れの「あるべき人間」という理念
13 に囚われ、「無間地獄」に陥っているのは、はたして反出生主義者だけなのかと
14 いう問題である。実際他の人々も同じではないだろうか。別の命を奪って生き
15 ること、生まれてしまったこの時代を生き、与えられた環境、与えられた身体
16 を死ぬまで背負っていかなければならないこと、しがらみのなかで生きざるを
17 えないために、ときに望まない自分を演出したり、望まない共同を引き受けた
18 りしなければならないこと、現代を生きるわれわれは、そのひとつひとつに破
19 滅的なまでの理不尽さを感じてしまう。だが、人間の生というものは元来そう
20 したものではなかったか。意のままにならない現実に向き合い、現実とともに
21 生きる力を、われわれ現代人はますます失いつつあるようにも見えるのである
22 ⁽²⁶⁾。その意味において、「世界観＝人間観」の歪みはこの時代を共有する人々全
23 体の問題である。そうした〈有限の生〉を生きるための作法や知恵こそが、改
24 めて求められていると言えるのである。

25 ふたつ目は、人間が生きることの究極的な意味や目的など、結局あるとは言
26 えないという主張についてである (Benatar 2008: 82-83=2017: 93)。実は筆者
27 は、この主張については基本的に同意している。しかし反出生主義の主張が奇
28 妙なのは、それを宇宙的な次元で証明できないからといって、直ちに生は続け

1 　るに値しないし、生まれてくるにも値しないという結論へと飛躍してしまうと
2 　ころである。この背景には、おそらくキリスト教（一神教）文化圏特有の事情
3 　があるように思える。つまり人間は神の姿を型取って創造された特別な存在で
4 　あり、そのような被造物に、神によって与えられた特別な使命や目的がないわ
5 　けがない、といった信念の裏返しなのではないか。したがってその発想は、全
6 　人類にとって決して普遍的なものではなく、われわれはそのことにいちいち
7 　ろたえる必要などないのである。生きる意味とは、生の当事者たちによって見
8 　いだされてきた、どこまでも人間的な世界の産物に過ぎない。それでもそれが
9 　かけがえのないものだと言えるのは、何ものかが見いだした言葉や、美や、役
10 　割や、願いが、来たるべき別の何ものかを勇気づけ、彼らが再びより良く生き
11 　るための意味を見いだす拠り所として、はての先まで受け継がれていくため
12 　ある。〈信頼〉とは、目で見て触り確かめることができないものを、それでも信
13 　じることを指す。そして自らは前を向いておのれの道を進んで行くことを意味
14 　している。生きる意味なるものがあるとするなら、それはそうした〈信頼〉の
15 　なかからこそ見いだされることになるだろう。

16

17 　〔注〕

18 　（注 1）反出生主義をめぐる日本の学術動向については、森岡（2021b）が詳しい。

19 　　反出生主義は 2010 年代になって急速に広がり、2017 年にはベネターの邦訳
20 　　書が刊行されたり、2019 年には『現代思想』（青土社）が特集を組んだりす
21 　　るなどして注目を集めている。

22 　（注 2）森岡も、後に反出生主義を「すべての人間あるいはすべての感覚ある存在
23 　　は生まれるべきではない」（森岡 2021b: 52）と主張するものとして再定義し、
24 　　ベネターの立場を「狭義の反出生主義」と位置づけている。

25 　（注 3）中川（2020）は、「（新たな存在は）生まれてくるべきではない」という
26 　　命題と、「（私が）生まれてこなければ良かった」という命題の関係性を分析
27 　　哲学的に考察し、少なくとも後者から前者を導くことは困難であるとの結論
28 　　を述べている。ただし反出生主義的な思考において、両者に結びつきがある

1 ことは間違いなく、本論では、そこにあるものこそ「世界観＝人間観」の歪
2 み、そして後に見る「無限責任」という信念なのではないかと考えている。

3 (注 4) 以下の論点は、ベネターが前掲書 (Benatar 2008=2017) の第二章で展開
4 した議論を筆者なりにシンプルな形で整理したものである。ここでベネター
5 はさまざまな反論を想定して精密な議論を展開しているが、本論での説明は
6 必要最小限のものに留めた。

7 (注 5) これ以上は踏み込まないが、ベネターの非対称性が誤りだと主張する試
8 みは、成否は別としていくつも存在する。例えば T・メッツ (2019) は、ベ
9 ネターが非対称性の根拠としてあげた社会通念が、苦痛の不在は「悪くない」、
10 快楽の不在は「良くない」とした場合でも十分に説明できるとしている。

11 (注 6) 反出生主義が思考実験として成功している理由は、生きること自体が根
12 本的に苦しみを伴うという明白な事実がある一方で、その主張の背後に「苦
13 痛のない世界こそが正しい世界である」との隠れた前提を置いているため
14 ある。この主張に同じ土俵から挑むのは得策ではなく、われわれはその背後
15 に潜むものにこそ目を向けるべきなのである。

16 (注 7) 筆者は以前、この「脳人間」世界の思考実験を別の角度から踏み込んで論
17 じたことがある (上柿 2021b)。

18 (注 8) このことは、功利主義が万能ではないことを示すひとつの根拠にもなる
19 だろう。功利主義が有効なのは、数値化可能な政策判断といった限定された
20 局面であって、それを生の本質にまで拡大解釈してはならないのである。

21 (注 9) したがって【命題】(1)を否定したからといって、ただちにいじめや拷問
22 が正当化されるということにはならない。なお、実はベネターの前掲書には
23 苦痛の不在が「悪くない」と仮定した場合についての言及がある。しかしベ
24 ネターはこのことを考察に値するものでさえないと考えていたようである
25 (Benatar 2008: 39=2017: 49)。

26 (注 10) 前掲書 (Benatar 2008=2017) の第三章における記述を参照のこと。

27 (注 11) 厳密に言うなら、【命題】(1)も【命題】(2)もともに、「良くも、悪く
28 もない」というのが本論の立場である。

1 (注 12) このように主張したからといって、それゆえ犯罪行為であっても正当化
2 されるということにはならない。むしろ刑法において常に情状酌量の余地が
3 検討されるのは、われわれの選択行為がそもそもそうした不可能性を帯びて
4 いる側面があるからである。

5 (注 13) 吉田 (2021: 85-86) は、「デジタル化」された世界の中で完全な個の自
6 由を成し遂げたつもりでいる人々のことを、皮肉を込めて「世俗的な神」と
7 呼んでいる。「為したいことを為せる神」にでもなった気である人々は、その
8 実「為せることのみを為したいと思いついでいる矮小な方向指示器」のごと
9 き存在に過ぎない。それと似て、「万能であることはすなわち虚無を意味し
10 て」いるのは、理念の世界に住む人々もまったく同じなのである。

11 (注 14) 品田 (2021) は、反出生主義をめぐる諸論点を、人類を滅亡させる力を
12 持つ魔王と、魔王の前に集められ、その是非について討論させられる 10 人
13 の人間たちをめぐる物語として描いた。同書の舞台設定は、こうした点から
14 も示唆に富んでいると言えるだろう。

15 (注 15) この意味での不可能性として酷似しているのは、「命あるものを殺して
16 食べることは道徳的な悪である」という理念の世界の命題を、そのまま現実
17 に持ち込んで、実際に人々の摂食行動を禁じようとする場合などである。

18 (注 16) 反出生主義者の心情を理解するための手がかりとして、以下のサイトも
19 有益である。「無生殖協会ウェブサイト」(<https://aapi.iimdofree.com/>
20 2022/10/07 閲覧), 「An Antinatalist Handbook (日本語版)」
21 (<https://antinatalisthandbook.org/languages/japanese/> 2022/10/07 閲覧)。

22 (注 17) 前者は品田 (2021: 29), 後者は森岡 (2020:54) を参照。ただし品田は、
23 この喩えを必ずしも反出生主義への批判としては用いていない。

24 (注 18) 例えば森岡 (2020: 299-300) を参照。また本論ではこれ以上は踏み込
25 まないが、この問題は、「非同一性問題」——たとえ未来に生まれてくるもの
26 に対して危害を加える行為であっても、その行為を行わなかった場合にはま
27 ったく異なる存在が誕生することになるため、その行為は単純に悪いとは言
28 えなくなる——にも繋がる論点でもある (加藤 2019, Singleton 2020)。

1 (注 19) 稲垣 (2022: 42) は、反出生主義の広がりについて、人々が自らの生の
2 苦しみや残酷さを前にしたとき、「絶滅」や「終わり」を想像することで、か
3 えて力みすぎた心の荷が降ろされ、「絶妙な力加減」のもとで明日を生き
4 られる効果があるからではないか、と指摘している。本論の枠組みから言え
5 ば、ここでの「力み」こそ、まさしく「無限責任」がもたらす重圧に相当し
6 よう。

7 (注 20) 筆者はこれまで、この問題を〈生の自己完結化〉と呼ぶ形で詳しく分析
8 してきた (上柿 2021a, 2021b)。

9 (注 21) これ以上は踏み込めないが、この問題の根底には、西洋近代哲学そのも
10 のが抱えてきた深刻な矛盾があるように思える。それは J・J・ルソー (J.
11 J. Rousseau) から I・カント (I. Kant) に至る系譜によって確立されてき
12 きた、「われわれはあるべき理念に相応しく現実を書き換えるべきだ」とする
13 特殊な信念の問題である。筆者はそれを〈無限の生〉の「世界観＝人間観」
14 と呼び、これまで考察を試みてきた (上柿 2021b)。

15 (注 22) こうした心情の背景として、確かに先行きの不透明さや経済格差といっ
16 た問題も関わりがあると言えるだろう。しかし振り返れば、この 30 年間常
17 に世の中は不透明であったし、これだけではなぜ格差社会の上位にも反出生
18 主義者が存在するのかということが説明できないだろう。

19 (注 23) 前述した功利主義の問題と同様に、ここでの手段と目的とをめぐる I・
20 カント (I. Kant) の枠組みもまた、拡大解釈を行うことで、途端に理念と現
21 実とをめぐる矛盾を引き起こすことになるのである。

22 (注 24) もちろんすべての人々が“善良”であるはずもなく、その試みの大半は、
23 振り返ってみれば空回りに見えるものばかりなのかもしれない。しかし未来
24 を予見できない人間存在にとってできることとは、結局それぐらいことでは
25 なかっただろうか。

26 (注 25) 〈信頼〉とは、盲目的に何かを身をゆだねることではなく、あやふやで、
27 触れて確かめることができない何かを、それでも信じられることを指す。そ
28 の願いは結果的に叶わないかもしれないが、叶わなければ仕方ない、しかし

1 可能性がある以上そうであることを願いたい——そういった心情である。
2 〈信頼〉には心の強さが求められるが、それ以上に求められるのは、人々が
3 〈信頼〉を共有できるだけの社会的土壌、人間的基盤だろう。
4 (注 26) 増田 (2020) はこの問題を、理想のルールを絶え間なく追い続けなければ
5 ならない徒労から、人々が自身の居合わせる環境に生きること、環境に存
6 在することの「重さ」に耐えきれなくなる問題として描いている。このこと
7 は、現代社会に拡大する自己肯定感の慢性的な低下の問題とも無関係ではな
8 いだろう。われわれが〈信頼〉できないのは、自分自身でもあるのである。

9

10 〔参考・引用文献〕

- 11 稲垣諭. 2022.『絶滅へようこそ——「終わり」からはじめる哲学入門』晶文社.
12 上柿崇英. 2021a. 『〈自己完結社会〉の成立——環境哲学と現代人間学のため
13 の思想的試み (上巻)』農林統計出版.
14 上柿崇英. 2021b. 『〈自己完結社会〉の成立——環境哲学と現代人間学のため
15 の思想的試み (下巻)』農林統計出版.
16 加藤秀一. 2019. 「「非同一性問題」再考」『現代思想』, 山口尚訳, 青土社, vol.47-
17 14, pp.136-145.
18 品田遊. 2021. 『ただしい人類滅亡計画——反出生主義をめぐる物語』イースト・
19 プレス.
20 中川優一. 2019. 「人生における「悲哀」と「あり得たはずの未来」」『現代生命
21 哲学研究』, 第 8 号, pp.21-32.
22 中川優一. 2020. 「産むことと生まれてきたこと——反出生主義における「出生」
23 概念の考察」『現代生命哲学研究』第 9 号, pp.54-79.
24 増田敬祐. 2020. 「存在の耐えきれない重さ——環境における他律の危機につ
25 いて」『現代人間学・人間存在論研究』大阪府立大学環境哲学・人間学研
26 究所, 第 4 号, pp.313-378.
27 水島淳. 2021. 『ひよこでもわかる反出生主義入門』(Kindle 版)
28 メッツ・T. 2019. 「生まれてこないほうが良いのか?」『現代思想』, 山口尚訳,

- 1 青土社, vol.47-14, pp.94-113.
- 2 森岡正博. 2020. 『生まれてこないほうが良かったのか？——生命の哲学へ！』
- 3 筑摩選書.
- 4 森岡正博. 2021a. 「デイヴィッド・ベネターの誕生害悪論はどこで間違えたか
- 5 ——生命の哲学の構築に向けて (12)」『現代生命哲学研究』, 第 10 号,
- 6 pp.1-38.
- 7 森岡正博. 2021b. 「反出生主義とは何か——その定義とカテゴリー」『現代生命
- 8 哲学研究』, 第 10 号, pp.39-67.
- 9 吉田健彦. 2021. 『メディアーム——ポストヒューマン時代のメディア論』共和
- 10 国
- 11 Benatar, David ([2006] 2008). *Better Never to Have Been: The Harm of Coming into*
- 12 *Existence*. Oxford University Press (D・ベネター. 2017. 『生まれてこない
- 13 方が良かった——存在してしまうことの害悪』小島和男／田村宜義訳, す
- 14 ずさわ書店) .
- 15 Singleton, Kei. 2020. *Review of Suffering vol.1: Anti-Natalism (Japanese Edition)*.
- 16 TheRealArg Books.
- 17 Singleton, Kei. 2021. 『[超要約] アンチナタリズム入門』
- 18 (<https://drive.google.com/file/d/1GkhMQPj2duAKxNXTwPcgqGzXqnuUebw>
- 19 [m/view](https://drive.google.com/file/d/1GkhMQPj2duAKxNXTwPcgqGzXqnuUebw) 2022/10/07 閲覧) .

1 Summary

2 Anti-natalism is an ideology that believes that any life born in the world is
3 harmful, and therefore we should not create new life in the world, and that it would
4 be better to exterminate humans as soon as possible. Anti-natalism has spread rapidly
5 in recent years, with the writings of D. Benetar. This argument is certainly persuasive
6 in principle. However, it is only valid in the ideas, and it is fundamentally impossible
7 to bring it into human reality. In real life, we cannot choose to eliminate a particular
8 pain (impossibility of eliminating pain), and we cannot choose a particular action in
9 a situation at will (impossibility of choice). We cannot grasp our own life as
10 independent of the lives of others, and we cannot hold ourselves responsible for it
11 (impossibility of independence).

12 However, the reason why this ideology strikes a chord with so many people
13 living today is because there is something in it that justifies a particular sentiment
14 held by people. Underlying this sentiment is the belief in *unlimited responsibility*, the
15 belief that one should take full and unlimited responsibility for all one's actions that
16 include affecting others and creating new life. In real human life, one cannot live
17 alone, but must influence others to live. Likewise, if new lives do not come into being,
18 those who have come before them will face tremendous hardship. There is a distorted
19 *world view = human view* that denies these many realities and fails in trying to take
20 responsibility that cannot be borne in the first place.

21 This illusion of *unlimited responsibility*, however, has only recently appeared
22 in history. The more fundamental problem is that modern society lacks the <trust> to
23 share responsibility for each other's lives. If we, as a society, continue to be unable
24 to foster the <trust>, and if we continue to be mired in the illusion of independence,
25 we will be forced to become more and more anti-natalist.

26 Keywords: 5 語程度のキーワード (英文)

27 anti-natalism, anti-procreationism, birth negation, unlimited responsibility, <trust>

1 800字程度の要旨（和文）

2 反出生主義とは「この世に出現するいかなる生も害悪であり、したがってわ
3 れわれは新たな生をこの世に生みだすべきではないし、人類など早々に絶滅し
4 た方が良い」と考える思想である。反出生主義は、D・ベネターの著作をひと
5 つの契機として、近年急速に広がっていった。この主張は、理念の上では確か
6 に一定の説得力を持っている。しかしそれはあくまで理念の世界でのみ成立す
7 るものでしかなく、人間的な現実には根源的な不可能性を伴って
8 いる。現実の生においては、われわれは特定の苦痛だけを選択して取り除くこ
9 とはできないし（苦痛除去の不可能性）、状況の中で特定の行動を意のままに選
10 択することもできない（選択の不可能性）。そして自身の生を他者の生から独立
11 したものとして捉え、その責任を問うことができない（自立の不可能性）とい
12 ったことである。

13 ただしこの思想が、現代を生きる少なくない人々の琴線に触れるのは、そこ
14 に人々の抱えた特定の心情を正当化する何かがあるためだと考えられる。その
15 心情の背景にあるのは、他者に影響を与え、新たな命を生み出すことを含め、
16 自身のあらゆる行動の全責任を無制限に負うべきだとする「無限責任」の信念
17 である。人間の現実においては、人は一人では生きられず、他者に影響を与え
18 て生きるしかない。同様に、新しい命が生まれてこなければ、先に生まれてし
19 まった人々は多大な困難に直面する。ここにあるのは、こうした数々の現実を
20 理念によって否定し、そもそも背負えるはずのない責任を背負おうとして挫折
21 してしまう、歪んだ「世界観＝人間観」なのである。

22 しかしこうした「無限責任」という幻想は、歴史的には最近になって出現し
23 てきたものに過ぎない。より根本的な問題は、現代社会において、互いの生の
24 責任を分け合おうとする〈信頼〉の契機がそもそも欠如していることである。
25 もしもわれわれが、この先も社会全体として〈信頼〉を育むことができず、あ
26 りもしない自立の幻想に浸り続けるのだとしたら、人々はますます反出生主義
27 者に傾倒せざるをえないだろう。